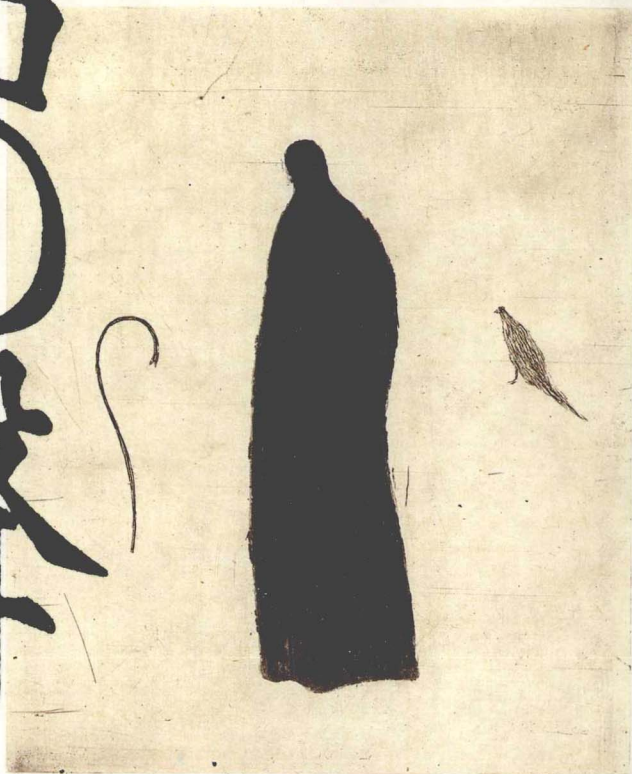


李良枝 Lee Yangji

石の聲



石の聲

李良枝 Lee Yungji

講談社



石の聲いしこえ

一九九二年九月二五日 第一刷発行

著者——李良枝イヤンジ

©Hiroshi Tanaka 1992. Printed in Japan



発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二 郵便番号 一一二―〇一
電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五―三五〇四

書籍第一販売部(〇三)五三九五―三六二二

書籍製作部(〇三)五三九五―三六一五

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——牧製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

目次

石の聲

3

李良枝略年譜

180

カバー装画 木村繁之

表紙・扉写真 島崎哲也 太

装幀 菊地信義

石の聲

一 そろえて
二 ならべて
三 いつき
四 まつり
五 さらに
六 たねを
七 ちらさじ
八 いわへ
九 おさめて
十 こころしずめて

一 そろえて

――義しさ

私は目を閉じ、瞼の裏側に自分の字体でその三文字を書きつける。ゆっくりと口の中で呟きながら瞼の裏側に、さらに文字を重ねて書きつけていく。

ただしさ、という音がまず浮かんだった。そのうちに、ただしさ、という言葉とその音とが、それ自体の持つ求心力と遠心力の波状に放たれる力の動きの中で、言葉自体が自ら当てはまる漢字を捜し出し、義しさ、という文字となって浮かんできた。

けれども、この不完全な感じはどこから来るのだろうか。危ういような、そして少しでも

この言葉の持つ世界に身を置けば、自分が跳ね返されてしまうような、怯えとも言っていない不安な感情がまといついてくる。

毎朝、私は目醒めてからしばらくの間、布団の中でじっとしている。

目を醒ますのは明け方だ。夜はまだ残っている。瞼に、手指のわずかなむくみに、カーテンの襞の間や部屋のそこここに、夜の余韻が息をしている。

そのまま二十分、あるいは長くて三十分、電気もつけずにまだ闇が残っている薄暗い部屋の中で、物思いにふける。まだ眠りのなかにあるのか、それとも目を醒ましきったのか、はつきりしない境目を味わいながら、まず夢を思い出す。夢を思い出した後で、ゆっくりと、意識をつまずかせないように気遣いながら、前日のことを思い返していく。

身体の内側、自分の身体を作っている骨という骨の芯の部分が、じわじわと熱くなってくるのがわかる。言いようのない安堵感だ。身体から力が抜け、緊張していながら解放され、心地よい興奮が身体全体に広がっていく。そして徐々に意識が集中しはじめる。まだ夢の中をさまよっているようでありながら、自分を感じ取ろうという意識は、いやに冴えてくる。かけがえのない、何物にもかえがたい状態が作りだされる。

そのうちに、ゆっくりと、記憶の中から湧き出てくるように言葉が浮かぶ。それは必ずといっていいほど浮かんでくる。

閃く^{ひらめく}、と言ったほうが適當だろうか。だが、あの感じ、あの状態は、閃くというのとは、どこか違っている。瞬間的に遠くから飛んできて、光が散って碎けるように言葉が現れる、というのではない。湧き出てくるのだ。あるいは、噴き出してもくる。言葉たちは、明確に、確実に、浮かび上がってくる。

夢を思い出し、前日のことを思い返していくうちに、言葉は現れる。前日から朝の目醒めに至るまでの一日の記憶は、過去に連なっている。遠い過去から続く時間の連なりの意外な隙間から、言葉は姿を現す。滲み出る。まるで息をするように、吸っては吐く記憶のうねりが、言葉を意識の表面に押し出してくる。

習慣となった儀式というのに近い。

何か言葉が浮かんでくると、私は目を閉じ、瞼の裏側にその言葉を描くように書きつける。文字の一画一画をなぞり、その言葉の音を反芻していくうちに、言葉はさまざま想念を引き出し始める。夢の記憶とも多分連なっているのだろう。言葉によって意外な映像

が浮かび上がってくる時もある。

布団のなかで、そうして目をつむり、あるいは薄く瞼を開き、私は立ち現れた言葉の裏側に身を置くようにじっとしている。文字や音に現れた言葉の面を付けながら、その裏から言葉の息を聞き取っていく。

ソウルに来てからしばらくして一種の儀式のように、朝、そういう時間を持つようになった。すでに、二年近くは続いている。

詩について、自分が日本語で書こうとしている詩について考えることができる時間が、朝の、目醒めたばかりのひとときしかないと感じた日から、その儀式は始まった。詩のことを集中して考える時間が欲しいと思いつめているうちに、知らず知らずに朝をそう過ぎようになり、それが儀式化していった、と言い換えてもいい。

言葉が浮かび、連なっていく。

それらが詩のきつかけとなることもあり、ある日は詩の一部として立ち現れる。噴き出すように、前後に連なる言葉をともない、詩が頭の中に書き留められていく日もある。

言葉たちは、待つのだ。私によって擱まれていくのを、私によって選ばれていくのを、

意識のなかに漂いながら待つ。その過程で言葉の方が私を引き寄せ、他の言葉を手繰り寄せてくる。私によって掴まれた言葉たちは、言葉そのものが持つ遠心力と求心力とで意識に刻みつけられていく。言葉は自らの力で自らの流れを生み出し、私を喚起し、鼓舞していく。前日の記憶は、言葉と言葉の間やその裏側に、まるで点描された絵のように塗り込められていく。

だが、消えていく言葉たちも多い。

私によって掴まれ、脳裏に刻みつけられていかない言葉たちは、力ない余韻を残して消えていく。大抵は意識の働くままにまかせ、消えていく言葉は敢えて追いかけるしない。かえってきっぱりと、余韻も臉に残った字面の残像も無視してしまう時もある。

二、三十分のそんな時間が、ひどく長く感じられる日があった。それでも消しがたい言葉があるのだ。消しがたいそれらの言葉の音や余韻にこだわりの、とらわれていくうちに、前日の記憶がその意味や姿を変え始め、混乱しはじめる。混乱は不愉快ではなく、日によっては刺激的ですらあったが、儀式を始めた頃はつらかった。

言葉から伝わってくる力と、自分の方から言葉に向かっていく力のバランスが崩れ、た

だ記憶と、記憶から放たれる印象に何の積極的な関わりも問いかねできないまま、ぼんやりとしているだけという状態は、焦りを募らせもした。

私はそつと瞼を開き、闇が漂っている天井の一点に目を凝らす。

今朝は、ただしき、から続く何行かの詩句が立ち現れ、ただしき、に当てはまる漢字を思いついた後で、戸惑ってしまった。

だが、この戸惑いは、言葉と自分との力の不均衡から来たものではない。混乱したり、焦っているわけでもない。言葉自らの力が、当てはまる漢字を捜し出した。ただしき、は、正しき、でも、貞しき、でもない。義しき、と書くしかないという思いは変わらないう。続く言葉たちも納得できる。けれども、この一つの言葉そのものに、危ういような、どこか不安な感情が付きまとう。

似たような状態を、前にも経験した。一体どんな言葉が浮かんできた日のことだったろう。

儀式を今日まで続けてきた一種の勘で、それ以上考えてもいたずらに時間が経っていくだけだと判断し、私は布団の中から、ゆっくりと起き上がる。

儀式の過程は、こうして目醒めの後で湧き出てきた言葉なり、詩句なりを、布団から起きて机の前に座り、ノートに書き留めることで、次の段階に入る。

いつものように、そのまま机の前に座る。

右側の引き出しからノートを取り出し、机の上に置く。

ノートは大学帳の大ききで、以前はワイヤで綴じられた少し厚めのものを使っていた。

最近は、というより、もうかなり前からだが普通に綴じられたノートを使っている。ノートを開いて見開きの空白のページを上下に開き、縦書きに文字を書いて使っていた初めの頃は、ワイヤ綴じのノートの方が都合がよかった。ワイヤ綴じであれば、ノートの中ごろまで来てもページを平たく使えるので書きやすい。普通に綴じたノートは、折った部分が盛り上がってしまつて書きにくいのだ。

けれども、ワイヤ綴じのノートは、誤つて書いたり、書いたものが気に入らなかつたりした時に、すぐにそのページを破ることが出来る。破りたい衝動も起こりやすい。実際に何度となく破つては棄ててきた。すると、破るという行為よりも、破つてもいいのだ、と思う自分の、ノートに対する緊張感の緩みが気になり始めた。そんな頃からノートを替

え、普通の大学帳を使うようになった。

言葉と自分との関係が、ノートとノートを使う自分との関係にも当てはまっていく。何よりも自分自身がどう在るか、が問われているのだと思う。言葉に対して切実であり、着実にあってこそ、書く行為と自分が一体化していくことができる。まさにそういう自分と言葉の関係のように、掴み、掴まれ、あるいは引き出し、引き出されていく過程の中で、書くことは自分を浄化し、鍛え、創り変えていくのだという気がする。

開いたノートを、上下ではなく左右に使うようになったのも、ワイヤ綴じのノートから普通のノートに替えてからのことだった。縦書きでも、横書きでも、その日の気分で好きなように書くことにしていた。

日常、韓国語は、横書きで書いたり読んだりしている。日本語で詩を書き続けて行きたいという思いと、日常使っている韓国語への思いはぶつかり合うしかなかった。横書きの韓国語、そして韓国語の音韻、響き、それらに対するこだわりや、抗いとしか言いようのない気持ち、こういう儀式を思いつかせたのもあったが、時間が経つうちに、縦書きにするか、横書きにするかは、あまり大きな問題ではなくなってきた。